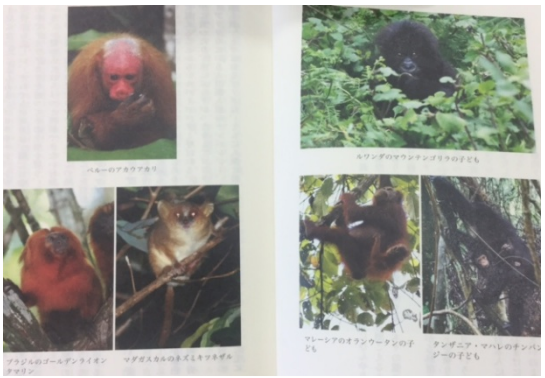
霊長類　消えゆく森の番人

昔から霊長類が好きだ。小学生の頃、なにかの縁で犬山の「モンキーセンター友の会」会員になった。今でも、自宅近くの東山動植物園に行くと、真っ先に類人猿コーナーをめざす。ゴリラやチンパンジー、オランウータンをじっと眺める。最近は、人気のイケメンゴリラよりも、すねた表情のオランウータンに目が向く。



そんなわけで、標題の 2017 年 5 月刊行の岩波新書を手にした。著者はジャーナリスト・井田徹治さん。表紙カバー裏から―アフリカ、アジア、中南米など世界各地で霊長類の姿を追い、研究と保護に取り組む研究者や急速に減る生息地を取材してきた著者。体長わずか 6 センチのピグミーネズミザルから体長 180 センチ体重 200 キロ超にもなるヒガシローランドゴリラまで、現在 496 種、亜種まで含めると 695 種を数える霊長類の未来は？

本書には、カラ―を含め多くの写真が掲載されている。写真を眺めているだけでも、多様な霊長類の世界に引き込まれる。だが、現実は厳しいものがある。終章から。

「万物の霊長」を自認する人類の行いによって、人類に最も近縁な動物である霊長類の多くが絶滅の危機に立っている。多くの人の努力によって状況が改善に向かっている種もいくつかはあるものの、研究者が何十年も前から指摘していた危機的な状況には残念ながら改善の兆しは見られない。もちろん、絶滅危惧種の増加は霊長類だけにとどまらない。

森林破壊や乱開発、違法な野生動物の取引など今の状況が続いたら、そう遠くない将来に大型類人猿をはじめとする多くの霊長類が絶滅することになる。それを防ぐためには、これまで当たり前に続けてきた生活を根本から見直すことが必要だ。それには大きなコストが伴うし、さまざまな抵抗もあるだろう。だが、霊長類が少なくなった味気ない地球を子供たちに残したくはない。そして、霊長類がこの地球上で存在しつづけることが人間にとっても重要であるということを忘れてはならない。人間も地球の生態系の中でしか生きられないのだから、環境破壊や種の絶滅はやがて人間の暮らしをもだめにすることになる。

（2017 年 8 月 6 日）